

大学生における死生観の構成概念の検討

畑崎 貴世 田島 えみ 畑 琴音 早稲田大学 木部 則雄 白百合女子大学
鈴木 伸一 早稲田大学

Examination of the construct validity of views of life and death among university students

Takayo HATASAKI, Emi TAJIMA, Kotone HATA (Waseda University), Norio KIBE (Shirayuri University),
and Shin-ichi SUZUKI (Waseda University)

Recently, issues related to death have become a social concern. The active confrontation with death in adolescence can deepen awareness of the preciousness of life and help students learn about the problems that accompany life and death. This study administered a questionnaire survey to organize students' constructs on life and death. College students (N = 146) attending universities in Tokyo participated in the study. Factor analysis of the Scale of View on Life and Death indicated that the scale consisted of five factors: "Fear of death," "Will to live a full life," "Death as a release from pain," "Avoidance of thoughts of death," and "Contemplation and concern about death." The results suggest that the current view of life and death may be changing under the influence of the historical background. The results also showed that college students tended to feel fear of death and tried to avoid thinking about death in their daily lives. Future studies are required to examine the concordance of this study's results between demographic variables, including gender.

Key words: view of life and death, university student, factor analysis.

Waseda Journal of Clinical Psychology
2022, Vol. 22, No. 1, pp. 51 - 58

近年、自殺や安楽死、少年による殺傷事件など、死に関する問題が社会的課題となっている（海老根, 2008）。一方、本邦においては、死について公に語ることはあまり好ましく思われない現状もある（海老根, 2008）。特に子どもや若者が自分の死について語ることや、家族や親しい者の間で互いの死について語ることは、縁起が悪いなどと避ける人も少なくない（海老根, 2008）。また、大学生を対象とした死や死後のイメージに関する調査では、死について語ることにタブー視されていることや、実際に他者の死を経験した場合でも、自身の死のイメージとは結び付けられないという特徴があることが明らかになっている（伊藤, 2007）。このように、「死」に関する話題をタブーとしたり、悲観的に捉えたりすることで、「死」へのイメージを抱く機会が少なくなっている可能性がある（後藤, 2016）。

現代社会において「死」に対する具体的なイメージを持てることは、人間において、生と死は表裏一体であることから（Deeken, 1990）、重要であると考えられる。Kubler-Ross（1997 鈴木訳 2001）は、人が目的のない虚しい人生を送ってしまう原因の1つとして、死の否認をあげている。また、死を意識することにより、人間は死ぬまで成長するとされている（Kubler-Ross,

1977 鈴木訳 2001）。他者の死の体験が契機となって死へのイメージを持つようになると、死の不安が軽減されることも報告されている（小谷, 2003）。以上から、豊かに生きて行く上で「死」について思慮深くなることが重要であり、「死」の概念やイメージを整理することは重要と考えられる。

死生観とは、「死と生にまつわる価値や目的などに関する考え方で、感情や信念を含む」と定義されている（丹下, 1999）。死生観は、主に高齢者層に偏在するものと指摘する研究もある（澤井, 2000）。しかしながら、死は老年期や不治の病を患っている人に限られたものではなく、青年期など若い年代の死生観を検討することが必要とされている。特に、青年期においては、Erikson（1950）により人生の中でも、アイデンティティ形成が発達危機として位置付けられている。例えば大学生は、就職活動や自分を成長させるための自己形成を進めていることが示唆されている（佐藤, 2017）。大学生は、社会に出るための準備をする最終段階であり、社会における自己を意識しやすい時期に死について考えることは重要である（後藤, 2016；飯塚・佐藤, 2006）。青年期において、死へのイメージを持つことは、人生そのものを考える機会となり、その後の人生

に対する基盤を形成することが考えられる（丹下, 1999）。

これまでの死生観に関する研究では、死に対する不安に着目した検討が多く扱われてきたが、現在は死を多面的に測定するべきと指摘されている（金児, 1994）。死に対する感情を、死の不安尺度（Templer, 1970）を用いて、否定的側面から測定するだけでなく、肯定的側面も含めて測定する必要があるとされ（丹下, 1999）、死の態度尺度（Wong, Reker, & Gresser, 1994）や死生観尺度（Spilka, Minton, & Sizemore, 1977）が開発されてきた。また、日本人独自の死生観尺度が丹下（1999；2004）や平井・坂口・安部・森川・柏木（2000）により開発されており、日本人の死生観は「死後の死生観」、「死への恐怖・不安」、「解放としての死」、「死からの回避」、「人生における目的意識」、「死への関心」、「寿命感」などの下位尺度から構成されていることが明らかになっている。

しかしながら、現在における死生観は、先行研究により明らかにされたものから変化している可能性が考えられる。その理由として、医療技術の発達や、文化の変化などといった時代背景の影響を強く受けている可能性があげられる。近年では、特定の宗教への信仰の減少、地域コミュニケーションの希薄化、親族の関係性の弱まり、経済情勢などにより埋葬が個人化し、葬儀方法や墓参りの方法が多様化している（森, 2010；坪内, 2011）。死後儀礼として、死の受容の契機となっていた法事（佐々木, 2005）や葬儀などの簡素化に伴い、死について考える機会が減少していると考えられる。

また、1997年の「臓器の移植に関する法律」の施行および2009年の改正や、日本老年医学会による2012年の「『高齢者の終末期の医療およびケア』に関する立場表明2012」の発表がされており、先行研究の実施期間前後において、健康寿命や尊厳死などについての社会的な捉え方が変化している（丹下ら, 2016）。

加えて、近年は大震災、新型コロナウイルスなどの、突然多くの人々が亡くなるという事態が生じている。厚生労働省（2020）の統計により、2020年の自殺者数が前年より増加したことが明らかになっており、その原因の1つとして新型コロナウイルスの影響が示唆されている（Tanaka, 2021）。これらのことから、死生観の再検討が必要であると考えられる。

さらに、青年期における死生観を検討する意義として、いずれ訪れる身近な人や自分自身の死に備えるための教育であるデス・エデュケーションの発展に寄与することがあげられる（大町, 1997；海老根, 2008）。これらの死生観に関する教育は、生きる意味や死ぬこととは何かについて考え、死や生に伴って生じる様々な問題について学ぶことを目的としている。死をマイナスのイメージで捉えているため、心の準備が必要と考えている人が多いことから（長崎・松岡・山下,

2006）、「死の準備教育」の必要性が示唆されている。

そこで、本研究では現代の青年期の若者における、死生観の構成概念を検討することを目的とし、先行研究との違いを検討する。

方 法

調査対象者と時期

都内の大学に通う大学生149名を対象に、調査を行った。回答に不備があった3名を除き、最終的に146名（男性10名・女性136名）を有効回答（回答率97.99%）とした。平均年齢は20.88歳（男性21.90歳・女性20.81歳）、標準偏差は1.24歳であった。

調査は、2021年9月中旬から10月末にかけ実施した。

調査内容

死生観に関する項目プール 死生観の構成概念の検討を目的として、丹下（1999）の作成した死に対する態度尺度と平井ら（2000）の作成した死生観尺度を用いて、死への態度を表す、死生観の項目を収集した。

収集された項目には、現在使用することが適切でない項目があったため修正した。具体的には、丹下（1999）の尺度の項目である「湾岸戦争で死人が出たということはまるで他人事だ」という項目を、湾岸戦争は現代の若者に身近な話題ではないと考えられたため「戦争で死人が出たということは他人事のように感じる」と変更した。その他、一部の項目は、丹下（1999）と平井ら（2000）で内容が似ている項目があったため、一方を消去した。また、読みやすさの観点から、読点・句読点の削除、語尾の変更、漢字への変換を行った。

上記の手順によって収集した項目に加えて、「周囲の人は死に影響を与えるか」を問う項目を作成した。日本人の国民性として、自己一人の専断的決定ではなく、他者との相互の関わりの中で意思決定していることが指摘されている（濱口, 1998）。また、家族は家族成員同士の情緒的な関係性を考えながら判断していることも示されている（長戸, 1999）。よって、死生観を検討する上で、当人の周囲にいる人物の影響性の検討も重要と考えた。

また、青年期の学生における死生観形成の影響要因として「死別体験」や「マスメディア」があげられている（竹山・岡光, 2018）。国際的なパンデミックにより死者数が増え、メディアにより選択された感染不安を煽るような報道により（宮本, 2021）、死が連想されている可能性が考えられることから、「ニュースなどで報じられる、事故、災害、感染症等による死は、他人事に感じられる」という項目を追加した。

死生観を検討した、丹下（1999）と平井ら（2000）の他に、隈部（2006）やWong et al.（1994）の研究では死後の世界について問う質問項目が多く含まれている。しかし、死後の世界と密接に関わる宗教観は、国

により大きく異なり（隈部，2006）、文化庁の統計で、6—7割の人が無宗教であることが分かっているため（村田，2020）、宗教観が関わる死後の世界について問う項目は不適切と考え、本尺度には含めなかった。

教示文は、「以下の質問は、現在のあなたの『死』『生き方』に関する考えを尋ねるものです。あなたの考えに最も近い選択肢を1つ選んでください。」であった。

最終的に66項目がプールされ、それらの項目を用いて、質問紙調査を行った。調査は、Google フォーム上での回答または、質問紙を直接配布しての回答により、1：全く思わない、2：あまり思わない、3：どちらでもない、4：少し当てはまる、5：非常によく当てはまる、の5件法で評定を求めた。また、項目20、23、39、45、53は逆転項目であった。

分析方法

項目を対象とした因子分析（最尤法、Promax 回転）を行い、因子名を命名した。因子分析を行う過程で、項目の因子負荷量の基準を.35以上とし、基準を満たさなかった項目は除外した。次に、因子間の相関係数を求めた。その後、死生観の構成概念を測定する項目としての信頼性の検討を行った。なお、全ての分析には、統計ソフト IBM SPSS Statistics 27 を使用した。

倫理的配慮

調査協力者には、調査目的を伝え、回答は任意であり、回答を望まない場合は回答をしなくてよいこと、不参加による不利益を被ることはないこと、匿名性やプライバシーを保証するために無記名方式で調査を行うこと、調査結果は研究目的以外に使用しないことを文面により説明した。

結 果

対象者の特徴

調査対象者の性別および年齢は、19歳の女性15名、20歳の女性44名、21歳の男性3名、女性41名、22歳の男性5名、女性31名、23歳の男性2名、女性4名、29歳の女性1名であった。

死生観の項目分析

項目分析として、得点化した死生観についての66項目全ての度数分布を確認した。度数分布の結果から、通過率の低い項目を除外する目的で、各全ての項目のうち、リッカート法の回答率が95%以上、5%以下だった項目を除外した。その結果、質問項目12、21、22、24、28、36、38、42、49、56、58、60、61、62、63、64、65、66が除外の対象となった。したがって、計18項目を除外し、残りの48項目を分析の対象とした。

死生観の構成概念についての検討

死生観の構成概念を検討するために、探索的な因子分析を行った。まず、因子の内容、スクリープロット、寄与率、適合度を総合的に判断し、5因子から構成されていると判断した。その後、5因子で固定し、.35以上の十分な因子負荷量を示さなかった9項目を分析から除外した。累積寄与率は58.46%であった。

次に、それぞれの因子に含まれる、各項目と因子全体の合計点が.30以上の相関を持つ項目のみを採用した。基準に満たなかった2項目を除外した37項目を最終的な項目数として再度因子分析を行った結果、最終的な累積寄与率は、59.14%であった。Promax 回転後の最終的な因子分析の結果をTable 1に示す。因子の内容は以下の通りである。

第1因子は、計12項目で構成されており、存在消滅の恐怖や未知の恐怖など、死に恐怖を感じている内容の項目の因子負荷量が高かった。そのため、「死への恐怖」因子と命名した。

第2因子は、計11項目で構成されており、少しでも長く最後まで生きる、自ら死を望まない、命より大事なものは無いといった内容の項目の因子負荷量が高かった。そのため、「生を全うする意志」因子と命名した。

第3因子は、計5項目で構成されており、死により、苦痛から解放されたり逃れたりすることができるといった内容の項目の因子負荷量が高かった。そのため、「苦痛からの解放としての死」因子と命名した。

第4因子は、計4項目で構成されており、死について考えないようにしたり、死に関する話題を避ける内容の項目の因子負荷量が高かった。そのため、「死の思考の回避」因子と命名した。

第5因子は、計5項目で構成されている。自分や身近な人の死について考えたり、死に関する題材を目にして「死とは何か」を考えるとといった内容の項目の因子負荷量が高かった。そのため、「死についての熟考や関心」因子と命名した。

死生観の因子間相関の検討

各因子の記述統計量および Pearson の積率相関係数を算出した (Table 2)。その結果、「死への恐怖」と「生を全うする意志」、「死の思考の回避」の間に有意な中程度の正の相関が示された ($r=.35, p<.001$; $r=.49, p<.001$)。「生を全うする意志」と「苦痛からの解放としての死」の間に有意な中程度の負の相関が示され ($r=-.43, p<.001$)、「生を全うする意志」と「死の思考の回避」の間には有意な中程度の正の相関が示された ($r=.39, p<.001$)。また、「死の思考の回避」と「死についての熟考や関心」の間に有意な弱い負の相関が示された ($r=-.25, p<.001$)。

Table 1
死生観尺度の因子構造の検討

	I	II	III	IV	V
I 死への恐怖 ($\alpha=0.93$)					
5. 死によって全てが終わるのかもしれないが、それでも死は怖い。	.88	-.11	-.08	.02	.11
6. 自分が死ぬことを考えると不安になる。	.87	-.10	-.03	-.01	-.05
1. 死ぬことが怖い。	.86	-.10	-.09	-.13	-.02
2. 「死」は恐ろしいものだと思う。	.83	-.14	-.05	-.03	-.11
3. 死の瞬間のことを思い浮かべると不安になる。	.80	.00	.11	-.03	-.02
7. 自分が消滅してしまうと思うと恐ろしい。	.78	.01	.04	.03	.02
8. 自分が存在しなくなるのは嫌だ。	.72	.21	.06	.02	.02
4. 死んだらどうなるのか、分からないので不安である。	.63	.05	.02	.17	.16
9. 死ぬといかなる体験も出来なくなるのが嫌だ。	.55	.13	.05	.07	.11
11. 死後自分の体に起こることが怖い。	.46	-.16	-.04	.23	.10
14. 人が死ぬと、自分の死について考えさせられるのが嫌だ。	.44	.05	.04	.27	.18
10. 死ぬと人々に忘れられるのが嫌だ。	.44	.23	.12	.16	-.03
II 生を全うする意思 ($\alpha=0.76$)					
41. どんなに治療が苦しくとも、生きることを諦めたくはない。	.09	.77	.10	-.22	.03
32. 未来は明るいと思う。	-.20	.74	-.13	.08	.01
40. 少しでも長く生きたいと思う。	.28	.71	.03	-.04	-.02
43. 私は不治の病になっても、自ら死を選ぶことはせずに最後まで生きる。	.00	.63	-.01	-.10	-.04
31. 私の人生について考えると、今ここにこうして生きている理由がはっきりとしている。	-.23	.62	.09	.27	.15
30. 私は人生にはっきりとした使命や目的を見出している。	-.29	.60	-.06	.16	.13
55. 命より大事なものは無い。	-.02	.56	.13	.10	-.01
45. 私は長生きしたくない。	-.31	-.52	.05	.13	.17
59. たとえ自ら死の選択を望むほど辛い状況下でも、家族や親しい人が望むなら生きようと思う。	.16	.44	-.15	.04	-.06
44. 自殺はしてはならないことだと思う。	.04	.44	-.22	.08	-.07
54. 自分がいつ死ぬかは知りたくない。	.09	.38	-.03	-.05	-.16
III 苦痛からの解放としての死 ($\alpha=0.91$)					
16. 死とはこの世の苦しみから逃れることだと思う。	.03	.00	.94	-.08	-.13
15. 死とは一切の苦痛から解放されることである。	-.06	.07	.94	.01	.01
17. 死により痛みや苦しみから解放される。	.04	.11	.91	-.07	.02
18. 死は人生の重荷や苦しみからの解放だと思う。	.00	-.14	.82	.08	.01
19. 全ての痛みは、死によって終わる。	.05	-.15	.44	.01	.10
IV 死の思考の回避 ($\alpha=0.83$)					
26. 死についてのことが頭に浮かばないようにしている。	.11	.03	-.02	.84	-.06
27. 死についての話題には、関わらないようにしている。	.09	-.10	-.01	.78	-.05
25. 普段は死について考えないようにしている。	.14	.05	.00	.72	-.25
29. たとえ小説や映画の中でも、人が死ぬ場面は嫌なものだ。	.04	.14	-.08	.41	.09
V 死についての熟考や関心 ($\alpha=0.72$)					
46. 「死とは何か」をよく考える。	.03	.04	.04	-.01	.81
47. 自分の死について考えることがよくある。	.11	-.10	.05	-.06	.80
48. 身近な人の死をよく考える。	.12	-.02	-.07	.06	.52
50. 自殺や安楽死・尊厳死を題材にした映画、本、ニュースなどに興味・関心があり、積極的に目にする。	.00	-.02	.02	-.19	.39
33. 死について考えることは、人を成長させる。	.06	.25	-.17	-.21	.37

Table 2
死生観尺度の記述統計量および Pearson の積率相関分析の結果

	<i>M</i>	<i>SD</i>	I	II	III	IV	V
I 死への恐怖	36.68	11.88	—				
II 生を全うする意思	34.12	7.38	.35 **	—			
III 苦痛からの解放としての死	15.14	5.41	-.11	-.43 **	—		
IV 死の思考の回避	10.77	4.00	.49 **	.39 **	-.16	—	
V 死についての熟考や関心	15.77	4.11	.08	-.15	.16	-.25 **	—

***p*<.001.

信頼性の検討

死生観の因子構造の信頼性を検討するために、内的整合性の指標である Cronbach の α 係数を算出した (Table 1)。「死への恐怖」が $\alpha=.93$ 、「生を全うする意志」が $\alpha=.76$ 、「苦痛からの解放としての死」が $\alpha=.91$ 、「死の思考の回避」が $\alpha=.83$ 、「死についての熟考や関心」が $\alpha=.72$ であった (Table 1)。全ての因子が $\alpha=.70$ 以上という一定の水準が示されたことから、概ね内的整合性が確認されたといえる。

考 察

本研究では、大学生の死生観の構成概念を明らかにすることを目的に、先行研究の死生観尺度を用いて、死生観の因子構造を検討した。死生観の因子分析では、死生観は「死への恐怖」、「生を全うする意志」、「苦痛からの解放としての死」、「死の思考の回避」、「死についての熟考や関心」の5つの因子で構成されていることが明らかとなった。

まず、死生観を構成する概念として5因子が抽出された結果から、青年期において、死は多次的・包括的に捉えられていると考えられる。死生観は、「死への恐怖」や「苦痛からの解放としての死」、「死の思考の回避」という否定的側面だけでなく、「未来は明るく思う」や「私は人生にはっきりとした使命や目的を見出している」といった項目からなる、人生を有意義なものとして捉える「生を全うする意思」因子も含まれていた。このことは、先行研究で死生観を6から7因子で捉えていたこととも一致している (海老根, 2008; 平井ら, 2000; 丹下, 1999)。また、青年期を対象とした諸研究において、死に対する態度について「ネガティブ」な反応だけでなく、「ポジティブ」な反応も見られることが示唆されている (藤井, 2003; 石坂, 2003, 2004; 丹下, 1999) こととも一致する。先行研究では、青年期の特徴として、死に対する否定的な態度が減少するとともに生に対する積極的な態度が減少することが示されている (尾形・増南, 2019)。さらに、本研究で「死についての熟考や関心」因子が抽出されたことは、青年期が、何らかのかたちで人生の意義や生の意味、死に対する関心をもつものが多い時期 (平山, 1991)

とされることと関連していると考えられる。

また、本研究と先行研究で、死生観を構成する因子数が異なる結果となった。このことから、現在の青年期の死生観は先行研究が実施された時期の死生観と異なり、時代により死生観が変化している可能性が考えられる。

加えて、幼児期の子どもは、生と死が未分化で現実と非現実の区別ができず、児童期から、生まれ変わりなどの死後の世界への想像、願望を持つ傾向が高くなる (仲村, 1994)。また、死別体験は死について考える契機となり、子どもの死生観に大きな影響を与える (仲村, 1994; 狩谷・渡會, 2011)。近年では、地域社会とのつながりの薄さや核家族化の進展、住宅事情の変化、医療機関や福祉・介護施設での看取りの増加に伴い、死に直面する機会が減少している (影山, 2003; 村田, 2013)。

高齢者の感じる死への恐怖は低く、年齢が上がるにつれ、死を恐れない人が増加することが明らかになっている (青木, 2000; 羽坂・岡本, 2006; 小谷, 2004)。2007年に高齢者を対象に実施された研究では、約7割の者が自分の死ではなく、近親者の死を考えていたことが明らかにされている (越智, 2015)。その後、2012年に、人生の最期を自分の望むように自分で準備することを意味する「終活」が流行し、2015年には、神奈川県横須賀市で「終活支援」が行われている。高齢者は自分の死について考えるようになり、死生観に大きな影響を与えていると考えられる。また、個人が経験する様々なライフイベントや他者との関わり、個人の心的様相の変化などの内的・外的要因の影響により、死に対する態度の変化が生じるとされている (丹下ら, 2016)。

これらのことから、青年期の死生観同様、高齢者の死生観も、時代の影響を受けて変化していると考えられることは自然である。しかしながら、現代の高齢者の死生観を検討している研究は少なく、その実態は明らかにされていない。今後の研究では、高齢者においても死生観の変化の有無を検討することが期待される。

以上のことから、時代や年代により死生観の構造は異なっていると言える。現代の大学生における死生観

の特徴として、死に対して恐怖や不安を感じており、死に関する思考を回避する傾向にあることや、生きようとする傾向にあるということが考えられる。また、死を多次的・包括的に捉える傾向にあるといえる。

次に、項目プールの際に参考にした丹下(1999)と平井ら(2000)の先行研究において抽出されているが、本研究で抽出されなかった因子として、「人生に対し死が持つ意味」、「人生における目的意識」、「寿命感」がある。丹下(1999)の研究における「人生に対し死が持つ意味」と、平井ら(2000)の研究における「人生における目的意識」は、死や人生を有意義なものとして捉える因子から構成されている。それらの項目は、本研究において「生を全うする意思」因子に該当した。一方で、十分な因子負荷量に満たなかったため除外された項目もある。「死は人間の進化の一端を担っている」、「死があるからこそ、人は精一杯生きるのだ」という項目が除外の対象となったことから、大学生の死生観を構成するものに含まれない可能性が示唆された。

さらに、除外対象となった項目として、平井ら(2000)の「寿命感」因子を構成する項目である「自分がいつ死ぬかは知りたくない」などがある。その結果から、大学生における死生観を構成するものとして「寿命感」は含まれない可能性が考えられる。このことは、大学生を対象にした調査で、ライフイメージと死生観との関連が見られない(川本・岡本, 2011)ことが影響していると考えられる。しかしながら、平井ら(2000)の研究も大学生を対象としていることから、本研究における対象者のほとんどが女性であったことやサンプルサイズの違いが関連している可能性が考えられる。加えて、丹下(1999)や平井ら(2000)の調査時から20年以上が経過していることから、時代の変化により現代の大学生の価値観が変化した可能性が考えられる。

死を他人事と捉える項目も除外対象となった。「戦争で死人が出たということは他人事のように感じる」という項目が、天井効果がみられ通過率が低かったため除外された。また、本研究において新たに作成した「ニュースなどで報じられる、事故、災害、感染症等による死は、他人事に感じられる」という項目は、「生を全うする意思」因子に逆転項目として含まれたが、因子負荷量が基準に満たなかったため除外された。戦争は多くの人にとって身近な出来事ではなく、災害や感染症などは比較的身近な出来事として感じているために項目の除外に差が生じたと考えられる。

「死への恐怖」と「死の思考の回避」の間に有意な中程度の正の相関が示されたことから、死への恐怖感情が高いと、死から逃れたいと考えることが分かった。さらに、「死への恐怖」と「生を全うする意思」との間にも有意な中程度の正の相関が示され、死を恐れることと、生きたいと思う感情は関連していることが示された。この関連が示された背景として、青年期の者が

死に対し恐怖を抱くとき、死は不可避で予測不能である、という存在論的脅威を緩衝しようと、生きる意味を再構築し、自身の存在を肯定的に捉え直そうとする傾向が考えられる(富塚・藤, 2017)。また、青年期の者は他の年代と比べて死に対する恐怖が大きい可能性も示されている(金見, 1994; 富松・稲谷, 2012)。以上から、大学生は死への恐怖を感じると同時に、生きる意味を模索する可能性が考えられる。死を意識することが、生に対する意識の活性化をもたらすことを示唆する研究もあり(Christine & Blascovich, 2012)、死生観を明確にすることは、生きるということ考えた上でも重要と考えられる。

「生を全うする意志」と「死の思考の回避」の間に有意な中程度の正の相関が示されたことから、生きたいと考えることと、死に関する場面や思考を避けることが、関連することが示された。しかしながら、人生の目標を設定したり、死を自分ごととして捉え、死について考えて死と向き合うことで、生きたいと考える傾向にあることが示されている(後藤, 2016)。「死の準備教育」の観点から、死を肯定的に捉えるため、人生の目標や計画を予め考えておくことが必要であるといえる。今後はそうした「死について語る場」の創出についても検討し、デス・エデュケーションにつなげるべきである。

本研究の限界点として、三点あげられる。第一に、一時点での横断調査であったことがあげられ、死の考えがどう変化していくかどうかを捉えることはできなかった。そのため、今後は縦断的な調査を行い、死生観を継時的に検討していくことが望まれる。第二に、調査協力者の男女比率に大きな偏りがあったため、性差の検討ができなかったことがある。しかし、性差の研究結果は、先行研究においても結果が一致していない。そのため、性差をはじめとした属性による違いに関しても検討する必要がある。第三に、他の心理的変数との関連性と検討できていないことがあげられる。このことにより、死生観をもつことの他の心理状態への影響性が不明瞭であると言える。丹下(1999)と平井ら(2000)の研究における死生観尺度で用いられていた項目と同様のほとんどの項目内容に関して妥当性は示されている。一方で、時代に合わせて先行研究を元に内容を変更した項目に関しては、死生観の項目の妥当性が示されていない。そのため、今後の研究において、他の心理的な概念と合わせて検討していくことが期待される。

引用文献

青木 邦男(2000). 在宅高齢者の死に対する意識の構造と加齢による変化 山口県立大学社会福祉学部紀要, 6, 77-86.

- 文化庁 (2020). 宗教統計調査. Retrieved from https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/shumu/index.html (閲覧日 2021年12月18日)
- Christine, M., & Blascovich, J. (2012). Enjoying life in the face of death: Eastwest differences in responses to mortality salience. *Journal of Personality and Social Psychology, 103*, 773–786.
- Deeken, A. (1990). 死生観の変遷をめぐる一考察 上智大学人間学会人間学紀要, 20, 75–90.
- 海老根 理絵 (2008). 死生観に関する研究の概観と展望 東京大学大学院教育学研究科紀要, 48, 193–202.
- Elisabeth Kubler-Ross 鈴木 晶 (訳) (2001). 続死ぬ瞬間——死、それは成長の最終段階—— 読売新聞社
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society* New York: W. W. Norton & Company. (エリクソン E. H. 仁科弥生訳 (1977). 幼児期と社会 みすず書房)
- 後藤 有紀 (2016). 大学生における死生観形成の要因 北星学園大学大学院論集, 7, 141–149.
- 濱口 恵俊 (1998). 何が日本人の行動を決めるのか 日本保険医療行動科学会年報, 13, 27–34.
- 羽坂 雄介・岡本 祐子 (2006). 過去のライフイベントの捉え方と生活満足度・将来展望・死に対する態度の関連 広島大学大学院心理臨床教育センター紀要, 5, 16–27.
- 平井 啓・坂口 幸弘・安部 幸志・森川 優子・柏木 哲夫 (2000). 死生観に関する研究——死生観尺度の構成と信頼性・妥当性の検証—— 死の臨床, 23, 71–76.
- 平山 正実 (1991). 死生学とはなにか 日本評論社
- 藤井 美和 (2003). 大学生のもつ「死」のイメージ——テキストマイニングによる分析——関西学院大学社会学部紀要, 95, 145–155.
- 飯塚 比奈子・佐藤 文子 (2006). 大学生における社会人としての自覚・責任の育成 日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集, 49, 7–7.
- 石坂 昌子 (2003). 死の意味づけの質的検討と量的検討——死に対する心理的理解 (1) —— 日本心理学会第 67 回大会発表論文集, 300.
- 石坂 昌子 (2004). 死の意味づけの関連要因の検討——死の対する心理的理解 (2) —— 日本心理学会第 68 回大会発表論文集, 289.
- 伊藤 雅之 (2007). 若者の死生観——日本人大学生が抱く死と死後のイメージ——愛知学院大学文学部紀要, 37, 95–100.
- 影山 隆之 (2003). 最近 20 年間の日本における青少年の死生観・自殺観に関する研究 こころの健康, 18 (2), 70–76.
- 狩谷 恭子・渡會 丹和子 (2011). 看護学生における死生観と死に対するイメージの学年比較 医療保健学研究, 2, 107–116.
- 川本 智映子・岡本 裕子 (2011). ライフイメージが及ぼす死観への影響——円環と直線のイメージ画を用いて—— 広島大学大学院心理臨床教育センター紀要, 10, 48–59.
- 金児 暁嗣 (1994). 大学生とその両親の死の不安と死観 大阪市立大学文学部紀要 (人文研究), 46, 537–564.
- 小谷 みどり (2003). 死のイメージと死生観 Life Design Report, 6, 4–15.
- 小谷 みどり (2004). 死に対する意識と死の恐れ 第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部ライフデザインレポート, 5, 4–15.
- 厚生労働省 (2020). 人口動態統計月報年計 (概数) の概況. Retrieved from <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai20/dl/gaikyouR2.pdf>. (閲覧日 2021年9月16日)
- 隈部 知更 (2006). 日本人の死生観に関する心理学的基礎研究: 死への態度に影響を及ぼす 4 要因についての分析 健康心理学研究, 19, 10–24.
- 宮本 聖二 (2021). 新型コロナウイルスとメディア デジタルアーカイブ学会誌, 5 (1), 25–31.
- 森 謙二 (2010). 葬送の個人化のゆくえ——日本型家族の解体と葬送—— 家族社会学研究, 22 (1), 30–42.
- 村田 ひろ子 (2020). 世界を読み解く国際比較調査 ISPP——その意義と課題—— 放送研究とその調査, 11, 36–48.
- 村田 真弓 (2013). 看取り期の死生観に関する研究動向と今後の課題 大妻女子大学人間関係学部紀要: 人間関係学研究, 15, 27–32.
- 長崎 雅子・松岡 文子・山下 一也 (2006). 年代および性別による死生観の違い 島根県立看護短期大学紀要, 12, 9–18.
- 長戸 和子 (1999). 家族の意思決定 臨床看護, 25, 1788–1793.
- 仲村 照子 (1994). 子どもの死の概念 発達心理学研究, 5 (1), 61–71.
- 尾形 和男・増南 太志 (2019). 青年の自己有能感形成要因と大学生活——児童期のつらい出来事, しつけに対する親の関わりから—— 埼玉学園大学紀要, 19, 91–103.
- 大町 公 (1997). 私の「死への準備教育」 法律文化社
- 越智 裕子 (2015). 高齢者の死生観に関する研究——「死生観」と「スピリチュアリティ」と「幸福な老い」との関連を中心に—— 聖学院大学総合研究所 Newsletter, 24 (3), 22–27.
- 佐々木 恵雲 (2005). グリーフケア——仏教の持つ可能性—— 心身医, 45 (3), 232–233.
- 佐藤 有耕 (2017). 青年期を中心とした発達の研究の動向と展望 教育心理学年報, 56, 24–45.
- 澤井 敦 (2000). 現代日本の死生観と社会構造 (上) 大妻女子大学人間関係学部紀要人間関係学研究, 13–29.
- Spilka, B., Stout, L., Minton, B., & Sizemore, D. (1977). Death and Personal faith: A psychometric investigation. *Journal of the Scientific Study of Religion, 16*, 169–178.
- 竹山 広美・岡光 京子 (2018). 青年期にある学生の死生観に関する研究の文献レビュー 広島国際大学看護学ジャーナル, 16, 29–38.
- Tanaka, T., & Okamoto, S. (2021). Increase in suicide following an initial decline during the COVID-19 pandemic in Japan. *Nature Human Behaviour, 5*, 229–238.

- 丹下 智香子 (1999). 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討 発達心理学研究, 70, 327-332.
- 丹下 智香子 (2004). 青年前期・中期における死に対する態度の変化 発達心理学研究, 15, 65-76.
- 丹下 智香子・西田 裕紀子・富田 真紀子・大塚 礼・安藤 富士子・下方 浩史 (2016). 成人中・後期における「死に対する態度」の縦断的検討 発達心理学研究, 27 (3), 232-242.
- Templer, D. I. (1970). The construction and validation of a Death Anxiety Scale *Journal of General Psychology*, 82, 165-177.
- 富松 梨花子・稲谷 ふみ枝 (2012). 死生観の世代間研究 久留米大学心理学研究, 11, 45-54.
- 富塚 澄江・藤 桂 (2017). 死に対する恐怖および回避健康行動に及ぼす影響 心理学研究, 88 (4), 327-336.
- 坪内 俊之 (2011). 現代日本における墓と葬送の変化 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 72, 139-142.
- Wong, P. T., Reker, G. T., & Gresser, G. (1994). Death attitude profile-revised: A multidimensional measure of attitudes toward death. Neimeyer, R. A. (ed.) *Death Anxiety Handbook*, 6, 121-148.